《論説・動向》

解題――ユディト・ポルマンと近世記憶実践の文化史――

安平　弦司

ライデン大学の近世オランダ史教授ユディト・ポルマン Judith Pollmann 博士の講演原稿「内戦を忘れ去る――近世ヨーロッパにおける調停戦略としての忘却――」の邦訳をお届けする。ポルマン教授は現在のオランダ史学界を牽引する最も優れた歴史家の 1 人であり、オランダに限らず世界中の近世史研究に大きな影響を与えている。教授はオランダ語や英語で数多くの重要な業績を残されており、*Past & Present* の編集委員でもある。教授の刊行物が邦訳されるのは今回が初めてであり、翻訳作業に携われたことを光栄に思う。

最初に、翻訳論文の元になった講演会に至る経緯を説明する。ポルマン先生は 2023 年 10 月 31 日に京都大学でご講演してくださった。この講演会から遡ること 5 年前の 2018 年、オランダ留学中だった私は小山哲先生から、同年度の京大近世史ゼミでポルマン先生の *Memory in Early Modern Europe*（下記の主要刊行物⑤を参照）を読んでいるということを伺った。小山先生も受講生（今回全文翻訳を引き受けてくださった藤田風花さんも受講生のお 1 人）も、同書をとても面白く読んでいる、とのことだった。2015 年にオランダのユトレヒトで生活し始めた直後から私は、ライデン大学でポルマン先生が世話役の 1 人となっている月に 1 度の中近世史ゼミにほぼ毎回出席するようになっており、小山先生からのお知らせを聞いてとても嬉しかった。ライデンのゼミ終わりのいつもの飲み会の席で私はポルマン先生に、私の出身である小山ゼミが *Memory in Early Modern Europe* をテキストとして使っていて好評だそうだ、ということを伝えた。彼女はとても驚き、喜んでおられた。遠い日本に自分の読者が居るのは嬉しいし光栄だ、いつか京都で講演できたらいいな、とおっしゃった。翌 2019 年春、ティルブルフ大学での博士号取得の後すぐに私はオランダを離れることになったが、その直前のメールのやり取りの中で彼女は、2020 年にプライベートで日本を旅行する計画を立てている、できれば京大で講演したいのでアレンジしてくれないか、とおっしゃった。二つ返事でお引き受けした。しかし、周知の通り、2020 年初めから新型コロナウイルス感染症が全世界を覆い、先生の来日は叶わなかった。昨年 2023 年の来日はポルマン先生と彼女のパートナーの数年来の念願がようやく叶って実現したものである。その貴重なプライベートの旅行の 1 日を割いて、彼女は京大に立ち寄りご講演してくださった。直接の指導下にあったことはないが、私は、いつもおおらかでどこまでも優しい彼女に何度も助けられてきた。また 1 つ彼女への恩が増えた。

個人的な感傷に浸り過ぎた。ここからポルマン先生の経歴を簡単にご紹介する。アムステルダム大学で歴史学を、ロンドンのウォーバーグ研究所 Warburg Institute でルネサンス学を学んだ後、ポルマン先生は 1998 年にアムステルダム大学で博士号を取得された。指導教員は翻訳論文の註でも言及があるヘンク・ファン・ニーロップ Henk van Nierop 現名誉教授である。博士論文は、翻訳論文にも登場する、ユトレヒトの人文主義者アルノルドゥス・ブヘリウス（1565–1641 年）の宗教的選択を論じている。この博士論文は、ブヘリウスの宗教的変遷（カトリックから穏健改革派へ、そして厳格改革派へと 2 度改宗）を、彼の日記から丹念に読み解くものであり、宗教改革と低地地方の対ハプスブルク反乱という大きな主題を、一個人の人生を通じて描きなおす刺激的な研究である。この博士論文以来ポルマン先生は、エゴ・ドキュメント分析を自家薬籠中のものとされており、翻訳論文でもエゴ・ドキュメントからの印象的な引用が著者の主張を的確に支えている。この博士論文の成果は英語化され、1999 年にマンチェスター大学出版会から刊行されている（主要刊行物②）。

1999 年から 2005 年まで、ポルマン先生はオックスフォード大学サマーヴィル・カレッジで近世ヨーロッパ史の教鞭をおとりになった。2005 年、彼女はライデン大学へと移られ、その近世オランダ史教授という栄誉あるポジションに就かれた。彼女のオフィスは「ホイジンガ」と呼ばれる建物の中にある（ライデン大学の建物は、他にも「リプシウス」等かつて

の教授の名を冠している）。ライデン着任以来、ポルマン先生は幾つもの大型研究プロジェクトを主導されてきた。代表的なものとしては、(A) 2008 年から 2013 年までの Tales of the Revolt: Memory, Oblivion and Identity in the Low Countries, 1566–1700、(B) 2015 年から 2020 年までの The Persistence of Civic Identities in the Netherlands, 1747–1848、(C) 2018 年から 2023 年までの Chronicling Novelty: New Knowledge in the Netherlands, 1500–1850 が挙げられる。いずれのプロジェクトも彼女自身による多数の研究成果を生み出しており、プロジェクトで雇用された博士号取得候補者やポスドクの数も多い。プロジェクト(B)の成果としては編著⑥があり、プロジェクト(C)の主要な成果には「1500–1800 年の低地地方におけるローカルな年代記」（https://kronieken.transkribus.eu/）というウェブサイトが含まれる。つい先日公開されたばかりの後者のウェブサイトは、AI 文字認識ツール Transkribus と民間ボランティアを含む多くの人間の力を借りて書き起こした、1500–1800 年に南北低地地方で編まれた 200 以上の手稿年代記の全文を検索可能な形で無料公開している。デジタル・ヒューマニティーズ先進国のオランダにおいても、このプロジェクトの成果は際立っており、世界中の低地地方史研究者が多大な恩恵を受けることになろう。

プロジェクト(A)は、英語の主要刊行物だけに絞っても、彼女の手による単著 2 冊③⑤や編著 1 冊④を刊行し、翻訳論文でも引用されているヤスパー・ファン・デァ・ステーン Jasper van der Steen（現ライデン大学助教）やマリアンヌ・エークハウト Marianne Eekhout（現ドルドレヒト博物館学芸員）の博士論文も生み出している。前述のように、ポルマン先生の研究手法の特徴の 1 つはエゴ・ドキュメントの精緻な読解にあり、そのことはプロジェクト(A)および(C)の成果によく現れている。単著③は、反乱の最中の低地地方におけるカトリック・アイデンティティの生成と変化を、エゴ・ドキュメント、特に俗人のそれを縦横に用いて描いている。プロジェクト(A)をポルマン先生と共に率いていたのは、翻訳論文でも言及がある、エリカ・カイパース准教授（アムステルダム自由大学）である。カイパース准教授や自身の弟子たちと共にポルマン先生が編んだのが *Memory before Modernity* という印象的な主題の論集④である。ポルマン先生は単著③の頃まで「アイデンティティ」をキータームとして用いておられたが、編著④の頃から「記憶」を前面に押し出されるようになった。この共同研究の集大成として位置づけられるのが単著⑤であり、翻訳論文はその中の第 6 章‘Acts of Oblivion’を下敷きとしている。編著④のタイトルで既に示唆されているように、単著⑤や翻訳論文では、近世的な記憶と近代的な記憶の対比が意識されている。

著者曰く（以下の記述は主に単著⑤序章に拠る）、1920・30 年代に始まる記憶研究 memory studies は主に近現代の記憶を扱っており、1980・90 年代頃までの歴史学、特に 1800 年以前の時代を扱う歴史学は、記憶のような「主観的」な過去との向き合い方を分析の主たる対象とはしていなかった。新しい文化史が勃興し、歴史家が扱う史料の幅を広げていく中、ようやく 2000 年頃から近世記憶研究が盛り上がりをみせるようになる。こうした研究状況を踏まえて編著④や単著⑤が目指したのが、近代以前の記憶実践の文化史である。特に単著⑤は、そのエッセンスが翻訳論文にも現れているように、記憶研究における学際的な理論的枠組みを援用しつつ、近世的な過去との向き合い方、記憶と忘却の実践のあり方を丹念に分析し、それを通じて「近代性 modernity」を逆照射して明らかにしようとしている。著者によれば、近世と近代の記憶実践の間には連続と断絶の双方がみいだせる。翻訳論文は、近世ヨーロッパの内戦（特にフランス宗教戦争と低地地方の反乱）の調停戦略であった恩赦・忘却法 act of oblivion、すなわち戦時に起こったことをあたかもなかったかの如く忘れること（実際には、過去を現在の行動の理由にしないこと）を紛争当事者に課す法およびその実践を分析している。紛争と忘却というテーマは極めて現代的でもある。論文の元になった講演は 2023 年 10 月末に行われているが、論文中でも若干の言及があるように、講演者＝著者も当日の聴衆の多くも、同月初めに起こり 2024 年 4 月現在でも未だに終わりがみえないイスラエル・ハマス戦争のことを想起せずにはいられなかった。

詳しくは翻訳論文をお読み頂きたいが、監訳者のみるところ、以下の主張がその核心である。著者によれば、近世の恩赦・忘却法が意図していたのは、過去と現在の間に新しい連続

性のある物語を再構築することであった。それ故、恩赦・忘却法は、過去との連続性を重視した中近世において、内戦の調停手段として好んで用いられていたのである。他方、過去ではなく未来との連続性を重んじる近代において、恩赦・忘却法は廃れることになる。とはいえ、近現代社会においても忘却は依然として紛争調停手段の 1 つであり得ている、ということも著者は強調している。著者は前近代と近現代の記憶・忘却実践の間に継続性と変化の両方をみているのである。

単著⑤序章で著者自身が認めているように、同書や翻訳論文が扱う地域には偏りがある。例えば著者自身の言語的制約と記憶実践についての先行研究の少なさから、東欧や北欧への言及はほとんどない。また、講演当日の質疑応答でも、内戦ではない国家間戦争において忘却はどういった役割を果たし得たか、といった疑問も投げかけられた。とはいえ、記憶実践の文化史という視角から「近代性」と「近世性 early modernity」という根源的な問題に接近する単著⑤と翻訳論文は、近世ヨーロッパ史研究の画期的な成果であり、時代・地域・分野を問わず多くの研究者に知的な刺激を与えるものであろう。

今回の翻訳は、我々西洋史学専修教員からの申し出を、ポルマン先生と単著⑤の出版元である Oxford University Press にご快諾頂けたおかげで実現した。先生と出版社に心からお礼申し上げる。単著⑤第 6 章には、講演では触れられていない事例（例えばイングランド内戦）についての分析も含まれている。単著⑤に所収された 7 章（序章と終章除く）のタイトルは以下の通りである。1. Scripting the Self; 2. Past and Present: The Virtues of Anachronism; 3. Customizing the Past; 4. Imaging Communities; 5. Living Legends: Myth, Memory, and Authenticity; 6. Acts of Oblivion; 7. Remembering Violence: Trauma, Atrocities, and Cosmopolitan Memories. 是非同書全体もお読み頂きたい。また、ポルマン先生をお迎えする際の準備にあたってご相談に乗って頂いた小山先生、講演に際して特殊講義の貴重な 1 回をお譲り頂いた金澤周作先生、そして翻訳をお引き受け頂いた藤田さんにもお礼申し上げる。

講演原稿の邦訳は翻訳者が行い、その草稿に監訳者が修正を施し訳註を挿入した。講演原稿において註がなかった箇所や不完全であった箇所では、著者の同意を得た上で監訳者が単著⑤第 6 章の該当箇所の註を挿入するか、著者からご教示頂いた文献情報を新たに追加した。講演原稿にも単著⑤第 6 章にも節区切りはなかったが、通読性を高めるため、訳者・監訳者の判断により幾つか区切りを設けた。〔〕内は監訳者の判断で補っており、原文のニュアンスを活かすために、翻訳文中に英語原文を付記した箇所もある。

（京都大学講師）

ポルマン先生の主要刊行物（英語のみ）

① Judith Pollmann, *Religious Choice in the Dutch Republic: The Reformation of Arnoldus Buchelius (1565–1641)* (Manchester: Manchester University Press, 1999).
② Judith Pollmann, ‘Countering the Reformation in France and the Netherlands: Clerical Leadership and Catholic Violence, 1560–1585’, *Past & Present* 190 (2006).
③ Judith Pollmann, *Catholic Identity and the Revolt of the Netherlands, 1520–1635* (Oxford: Oxford University Press, 2011).
④ Erika Kuijpers, Judith Pollmann, Johannes Müller, and Jasper van der Steen (eds.), *Memory before Modernity: Practices of Memory in Early Modern Europe* (Leiden: Brill, 2013).下記 URL から無料で全文ダウンロード可能。https://brill.com/display/title/24694
⑤ Judith Pollmann, *Memory in Early Modern Europe, 1500–1800* (Oxford: Oxford University Press, 2017).
⑥ Judith Pollmann & Henk te Volde (eds.), *Civic Continuities in an Age of Revolutionary Change, c.1750–1850* (London: Palgrave Macmillan, 2022).下記 URL から無料で全文ダウンロード可能。https://link.springer.com/book/10.1007/978-3-031-09504-7